

中部の

エネルギーを 築いた

人々

長良川発電所、土岐川発電所、宮城第一発電所
建設を担当した技師 **太田国馨**

太田国馨は、名古屋電灯の長良川発電所、熱田火力発電所や、安曇電気の宮城第一発電所、多治見電灯所の土岐川発電所の建設を担当した技師である。太田は、明治9年3月、旧尾張藩士松井武囀の5男として愛知郡愛知町字牧野に生まれた。父武囀は、藤田東湖に私淑し、維新後は家塾を開いて地方青年の教育にあっていた。後に(昭和8年)、陸軍大将となった松井石根は、国馨の実弟(6男)である。

太田は鹿児島高等中学造士館に学び、第五高等学校(熊本)を経て東京帝国大学に入り、明治36年7月電気工学科を卒業した。大学時代の同級生には、名古屋電力の技師、名古屋電気鉄道の技師長を務めた小山朝佐がいた。在学中の35年に服部ひさと結婚し、絶家状態となっていた太田家(妻ひさの祖父の生家)を再興し、太田姓となった。



太田国馨

野口遵・シーメンス系の技師として

明治35年に、大学実習生として、駿豆電気の電気工事に関わった。同社には、後に電気化学工業のパイオニアとなる野口遵が取締役技師長に就いており、建設中の平井発電所はドイツ製機械(フォイト製水車、シーメンス製発電機)を使用していた。太田の関わった発電所の多くに野口遵やシーメンス社との繋がりが見られるが、この実習が機縁となった。

明治36年7月、大学卒業と同時に、安曇電

気の技師長兼支配人に就任する。同社も野口遵が関わった会社で、長野県南安曇郡有明村に宮城第一発電所(250kW、フォイト製水車、シーメンス製発電機を採用)の建設を担



野口 遵



安曇電気 宮城第一発電所 水車発電機



安曇電気 宮城第一発電所 機器輸送風景

当し37年8月に完成、大町始め4ヶ町村供給した。同発電所の水車・発電機は、設置以来110年を経過して今日も稼働中であり、わが国現存最古の設備である。(太田は明治38年2月の『電気之友』に「信州安曇電気株式会社工事概況」を寄稿している。)

太田は明治37年12月同社を辞し、一年志願兵として第三師団歩兵第六聯隊に入営、翌38年11月満期除隊となった(40年10月には陸軍歩兵少尉、正八位に叙されている)。除隊後の明治39年1月、多治見電灯所土岐川発電所(150kW)の技師長となり、工事監督の委託を受ける。多治見電灯所は加藤喜平、乙三郎兄弟が設立した電灯会社で、発電所はフォイト製水車、シーメンス製発電機を採用していた。39年10月に運転を開始し、岐阜県で5番目の電灯を灯した。

土岐川発電所の工事完了後の明治39年1月、曾木電気(社長野口遵)の技師長に就任する。鹿児島県伊佐郡大口村にある名勝曾木の滝の下流に曾木発電所(800kW、フォイト製水車、シーメンス製発電機採用)を40年



多治見電灯所 土岐川発電所外観(当時)



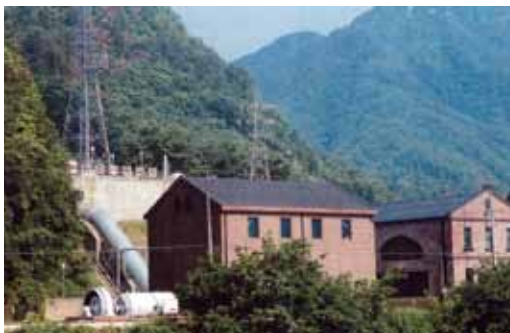
曾木電気 曾木発電所遺構(写真提供：九州ヘリテージ)

10月に完成し、大口鉱山への電力供給や近隣への電灯供給を行ったが、明治41年8月、石灰窒素肥料を生産する電気化学工業へと転じ、日本窒素肥料へと改称している。

名古屋電灯技師長

明治42年9月、名古屋電灯の長良川発電所の建設が始まると、太田は懇請して郷里に戻り、同発電所の建設を担当した。長良川発電所(4,200kW)は、野口がシーメンス技師

であった時代に手掛けていた地点で、シーメンス名義で水利権を継承した後、名古屋電灯に譲渡する形で建設された。フォイト製水車、シーメンス製発電機を採用し、名古屋



名古屋電灯 長良川発電所外観(現況)

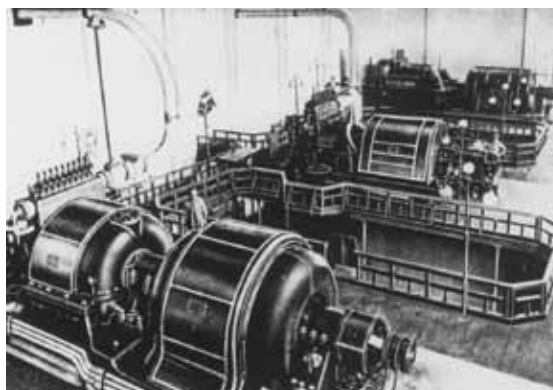


名古屋電灯 長良川発電所 水車発電機展示

電灯が建設した最初の水力発電所となった。その後、名古屋電力から引き継いだ八百津発電所(7,500kW)の建設に取りかかり、難工事に苦しみながら、明治44



名古屋電灯 熱田火力発電所 外観(当時)



名古屋電灯 熱田火力発電所(内部装置)

年11月に完成させ、大正2年6月、名古屋電灯の技師長に就任した。さらに第1次大戦とともに電力需要が勃興するなか、補給火力として熱田火力(3,000kW)の建設に取り組み、大正4年9月に完成した(大正6年9月

には3,500kW増設)。同発電所機械室一隅で、副業として事業化を進めていた電気製鋼の試験が行われたが、後の電気製鋼所(現大同特殊鋼)の濫觴となった。

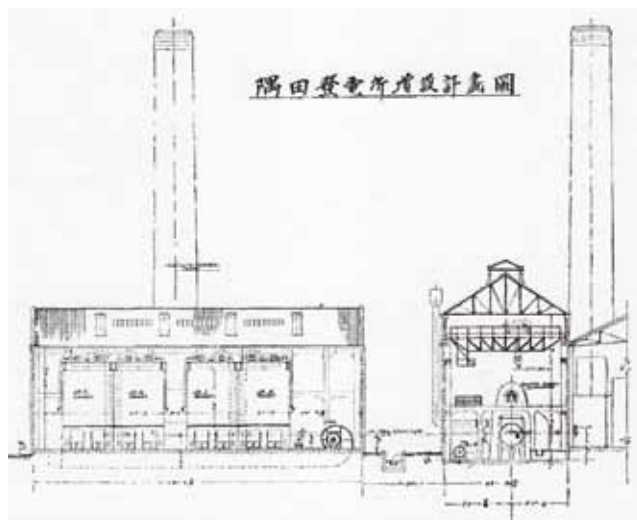
鬼怒川水力電気技師長

大正6年8月、太田は名古屋電灯を辞し、鬼怒川水力電気(明治43年創設)の技師長に就任する。同社は小田急電鉄の親会社にあたり、栃木県の鬼怒川に下滝発電所(31,200kW)を建設していた。太田は東京府田端駅の東北、隅田川畔に隅田火力発電所(8,000kW)の建設を担当し、大正8年12月に完成、その後増設を繰り返し、昭和2年に2万1000kWとなっている。名古屋電灯での熱田火力の経験を踏まえて招かれたものと推察される。

太田は、鬼怒川水力電気の技師長の傍ら、大正末から昭和5年8月迄、多治見中部電力の監査役に就任している。若き日、多治見電灯所土岐川発電所の建設に関わったことが機縁で、同社が多治見電灯合名会社から中部電力株式会社へと改組された後、請われて就任したものであろう。

昭和9年11月、58歳で逝去。趣味は読書と旅行、技術者には不似合いなほど快活な人物で、何人にも分け隔てせず、人を引きつける魅力があったという。

(浅野 伸一)



鬼怒川水力電気 隅田火力発電所増設計画図
出典：太田国馨「隅田火力発電所増設工事」
(『土木建築工事画報』昭和2年11月)